

ハンガリー音楽教育（コダーイ・メソッド）の研究

柏瀬 愛子

Study on Music Education in Hungary (Kodály Method)

Aiko KASHIWASE

はじめに

1973年の夏アメリカで開かれた第1回国際コダーイ・シンポジウムにおいて、「こんにち、世界中の子どもたちが歌を嫌い、うたおうとしない傾向にある」と報ぜられた。以来、世界各国でこの問題についていかに対処すべきかが、音楽教育専門家および各教育部門に携わる多くの教師達によって論ぜられ、熱心に研究されはじめた。このことに起因して人々の関心の的となったのがハンガリーの音楽教育法である。

この教育法は、40余年の昔、「すべての人のための音楽」という標語をかかげたコダーイによって考案されたものである。この方法が生まれたことによって、文盲の国といわれていたハンガリーの音楽教育に大きな変革がみられた。以来、多くのすぐれた作曲家や音楽教師がハンガリーから生まれ育つようになった。

音楽教育の本来の目的は、子どもが生まれながらにもっている音楽性を育て、素朴な音楽愛好心をもたせることと、豊かな情操教育、人間教育をすることである。しかし、こんにち、わが国をはじめ世界各国において、ゆがんだ社会的欲求により、目的からかけ離れた中途半端な芸術家養成まがいの音楽教育がおこなわれている。音楽嫌い、歌嫌いをつくる原因は案外こうしたことにあるのではないだろうか。

現在注目をあびているコダーイ・システムについて追求し、この方法によって教育をしたとき、子どもたちにどのような反応が現れるか、実践し考察してみた。

I コダーイ・システムについて

1 コーダイ・ゾルタンの略歴

コダーイ・ゾルタン (Kodály Zoltán) は1882年、ケチュケメートに生まれた。ヴァイオリンを弾く父、ピアノを弾く母と音楽的環境に恵まれ、幼少から室内楽に接する機会が多く与えられたが、父が鉄道官吏であったためハンガリー国内を転々と移住していた。1891年、彼が9歳の時、一家は、やっとナジゾンバートに落ち着いた。これを機会にカトリック系の学校に入学し、ここでピアノのレッスンを受けるようになった。さらに教会の聖歌隊に入るなど、音楽の勉強に力を入れはじめた。やがて、彼は、合唱とオーケストラのためのミサや奉獻唱などの作品を手がけるようになった。1900年、奨学金を得てブタペストの大学に入り、フランス文化や人文主義について学んだ。このことは、やがて、彼の手がける作品の中に、印象主義的傾向、16世紀イタリアのポリフォニー的傾向として現われた。1902年、ブタペスト音楽院に入学、ハンス・ケスラーに師事し作曲を学んだ。以来、彼の生涯は、作曲と民謡の研究、民謡に基づく国民的な音楽教育という分野でしめられるようになった。なかでも、マジヤール（ハン

ガリー) 民謡の収集と、これらの組織的、歴史的な研究は偉大な論文となっている。また、マジャール語と旋律の関係追求の仕事からは、多くの作品(ハンガリーわらべ唄)が生まれた。これらは、現在、こどもたちの音楽教育教材として利用されている。

やがて彼は「音楽を愛することは、自国語を愛し、その自国語をうたうことである」と説き、自らハンガリー民謡による音楽教育の実践を学校教育や成人教育のなかでおこなっていった。この革新的な方法が、ハンガリー国民の音楽的意識を高め、音楽的な趣味を変革し、こんにちのハンガリー音楽王国を築く土台となったのである。

作曲家として、音楽教育家として多大な業績をのこしたコダーイは、その晩年には、国際音楽教育(ISME)の会長をつとめている。1963年3月、還らぬ人となった。

主 要 作 品

・オペラ つむぎ部屋(1924年)・ピアノ曲 9つの小曲(1910年)・声楽曲 ハンガリーの詩篇(1923年)・室内楽曲 バッハの3つのコラール前奏曲の編曲(1924年)・管弦楽曲 夏の日の夕べ(1906年)、ガランダ舞曲(1933年)、ハンガリー民謡・クジャクによる変奏曲(1939年)

2 コダーイの音楽教育の見解

コダーイは、講演など機会があるたびに、音楽教育の一般的水準を高める必要性を説き、幼少から16歳までの才能の成長期により音楽経験をたくさん与えることが音楽文化の進展に大きく寄与することを強調し、この理由から学校教育における音楽教科の位置づけや構造の組織化を提起している。

コダーイの考えをまとめてみると、

- 1) 音楽の真髄に近づくもっともよい手段は、だれでもが持っている楽器「のど」を使つてうたうことである。
- 2) メロディーの練習は、まず、うたって教えるべきで、鍵盤楽器に頼って教えるはならない。
- 3) 毎日一度は身体を動かさせ、自然に発声することのできる自国語によって作られているうた(わらべ唄)をうたわせ、人と声を合わせることの喜びを知らせねばならない。
- 4) 自ら、音を読むことができるようにするために、楽譜の読み書きを知らせねばならない。そのために必要になってくるのが理論である。
- 5) 多くの音の性格や調性を教えるのには、移動ド唱法が適している。
- 6) 自国語の音楽で正しい音程感を身につけさせたら、次いで諸外国のすぐれた民謡をはじめ多くの合唱教材をあつかい、最高の芸術性へのふれあいをもたせよう。となる。

この見解から言えることは、音楽教育の基礎は幼いときから身近かな教材を使って、自然にうたわせながら、音楽的内容の理解を深め技術の向上を計ってゆく、すなわち、音楽の生命の源を供給する流れを体の中で感じさせる教育をしてゆくことではないだろうか。

3 コダーイ・メソッド

コダーイ・メソッドとは、コダーイによって考案された音楽教育法ではあるが、もともとは、外国のすぐれた音楽教育家の仕事の採り入れたものである。その基本原則となったものほとんどはスイスのペスタロッチや、ドイツのレオ・ケステンベルクのものであると言われている。メソッドの内容を具体的にまとめてみると、

- 1) こどもの情操性の育成と音楽的諸能力の養成。
- 2) リズム運動を媒体とする音楽訓練。
- 3) こどもが悪い音楽に染まらないように予防するため、ごく幼いときから、こどもに合った音域と、その年齢で理解することのできることを使った遊戯的教材（わらべ唄）での音楽訓練。
- 4) 正確な音程、調性感を育てるためのソルフェージュ。

こうした内容を年齢や能力に応じて、段階的、発展的に組織化し普通教育の中で無理なく教えてゆくことが、コダーイ・メソードの原則であり、特徴でもある。このコダーイの意志に基づいた音楽教育カリキュラム（ハンガリーの一般保育園用）は、前報の「幼児の創造的表現力を育てる音楽教育」のなかで述べたので、ここでは省略する。

Ⅱ コダーイ・メソードによる音楽教育の実践

以上述べてきたコダーイの音楽教育への見解や、メソードの原則をふまえ、今回は器楽指導における個人レッスン（ピアノ）での実践を試みたので、その経過を報告する。

ピアノ指導実践報告

1 被実験者 6歳4月のM子と6歳1月のU子の2名（いずれもレッスン開始時）

2人とも同じ団地内に住む会社員を父に持つ、ごくあたりまえの家庭の子女である。これまでの音楽的環境は、両名とも姉がピアノを弾くことと、幼稚園時代にさまざまな歌を習い、リズムあそびを経験していることから、比較的良いと判断した。

2 レッスン開始期 昭和49年4月

3 レッスン方法 始めてから3カ月の間は2人をできるだけ一緒にこさせ、あそびうたを中心としたソルフェージュや、指あそび、腕運動などを行なった（約1時間位）。4カ月目に入ったところで、別個に指導する方が効果的なことと、一緒に指導する方がよいこととがでてきたので、互いに来てもらう時間に20分の時差を置いた。2人が一緒のときは、ソルフェージュを中心とし、別個のときは、譜への理解ということを中心とした。7カ月目より弾くことが主体となったので、それぞれ時間を決め、M子は1人で、U子は中学1年の姉とともに来るようになった。現在では、1人約1時間のレッスンを楽しそうに行なっている。

4 練習の課程

1) 音楽上の知識と音楽的素材

- ① 耳から音をおぼえる。すべての音楽知識獲得のもととなるので長期間をかけ、幹音、派生音のききとりが完全にできるようにする（現在も継続）。
- ② リズムの訓練・音楽の諸要素であるため意識的な認識をもつようにする。
- ③ 音符をおぼえる。拍の結合や分割を音符チェッカー（色板カード）を使っておぼえる。
- ④ 音と五線上の位置（読譜練習）。
- ⑤ 自分で好きな音をうたい、それを音符に書く、打つ（拍やリズム）弾く。
- ⑥ ハンドサインをおぼえる。（この方法は、ジョン・スペンサー・カウエン≪イギリス、1816～1880年≫によって考案された手読譜法である。移動ド唱法における、その

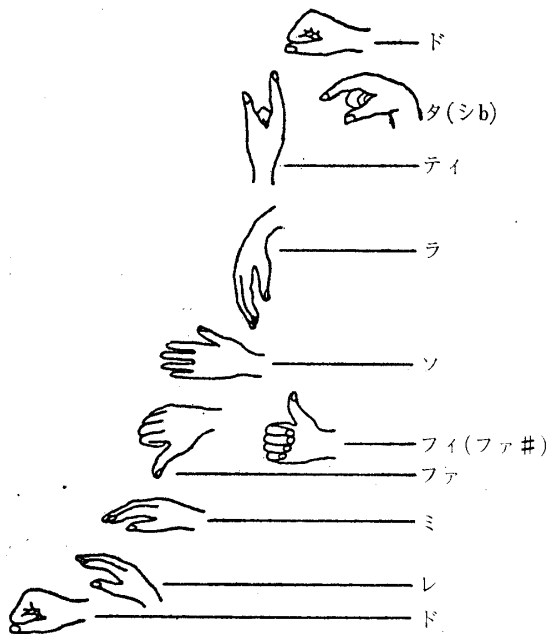


図1 カウエンのハンドサインに改良を加えたもの

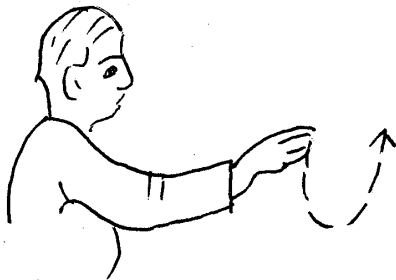


図2 腕の練習



図3 指の練習 (a)



図4 指の練習 (b)



図5 指の練習 (c)

読譜を簡単にすることから、コダーイによって多少修正が加えられ、今日のハンガリーでは常用されている。ごく幼い子ども、このサインによって正しくうたうことができると伝えられている。

- ⑦ 音楽上必要な記号をおぼえる。(強弱記号・省略記号に関するもの)。
- ⑧ 簡単な標語をおぼえる。(発想に関するもの、唱法、演奏に関するもの)。
- ⑨ b, #, ♯, の知識。
- ⑩ 形式感。(曲のはじめ、終わり、途中の区別)。

2) テクニック

始めのうちは、ピアノの前に座ったときの姿勢と手の形、指の格好などについて、説明する。(このことは大切であるためめびしく躰ける。) ついでテクニクに入る。

- ① 腕の練習(腕運動) 腕の力を抜くこと、重みをかけること、肩から自然な動きをすることなどを知らせるための運動。
 - a. 遊戯うたをうたいながら、腕を肩の高さにあげ軽く振り拍子をとる。
 - b. 自然なタッチの感じを知るための机たたき。
 - c. 空中で半円、円、3、8を描く。
- ② 指の練習(指あそび) 指の機能を発達させるための運動で、手、指によるいろいろなあそび。
 - a. 軽くにぎったげんこつの開閉(むすんで開いて)と、1本ずつ指を立てたり、力を抜いておろしたりする(この指だれでしょ)。
 - b. 指のつけ根から左右両回りに円を描く。
 - c. 親指たたき、他の1本ずつの指で親指を軽く打ったり、強く打ったりする。
 - d. トリルの練習、指はじき、指鳴らしなど指先を早く動かす。
- ③ タッチの練習。レガート、ノシレガート、スタカット、強い音、弱い音などいろいろなタッチで好きなうたを弾く。
- ④ 簡単な標語をおぼえることによって曲想をつけた演奏をする。

5 指導内容 毎回、前のレッスンで行なったことを復習する建て前としていたので、新しく組み入れたことだけ述べる。

- 第1週 ピアノとお友達になろう。(ピアノの内部を見せ、音の出る仕組みを話す。)姿勢の話。指の番号(指あそび)。
- 第2週～3週 指あそび(a)と腕運動(a)。
隣接した2つの音(長2度)を使って音出しあそびをする。(いろいろな高さを使う)、音名をおぼえる。
- 第4週～6週 指あそび(b, c, d)。
合唱法を利用した音出しと、うた(5音階の音楽と333の読譜練習のなかから題材を選ぶ)。
おぼえた音名をうたってメロディーをつくる。
- 第7週 知っているうたを利用した音さがしと、リズム打ち。(音さがしに使った音形を手で打ったり、足ふみしたりする)。
軽いタッチ、ノンレガート奏の練習。
リズム唱 o(モウモウ)、d(モーウ)。
3つの音を使ってうたをつくる。
- 第8週 ト音記号をおぼえる。
5線上の音(レ～ソ)までの位置をおぼえる。(5線板とおはじきを使って、鍵盤と5線紙上の音符を結びつける)。
- 第9週 リズム唱 ♩(タン)、♪(タ)。
加線をおぼえる(上下とも2線をあつかう)。
- 第10週 いろいろな音の階段(5音の組み合わせでオクターブを弾く)
- 第11週～15週 軽いタッチ、スタカト奏の練習。
休符、和音(3度の和音)
メロディーつなぎ(曲の続く、終わる感じを知らせる)。
- 第16週～21週 5度音階の上行と下行(片手奏と両手奏で、いろいろな場所を使い黒鍵にも慣れさせる)。
なめらかなタッチ、レガート奏の練習。
音符を書く。(o, d, ♩)。
階名読みと階名唱。
和音(5度の和音)
ハンドサイン唱。
エチュード(メトードローズ)による指練習と読譜練習。
- 第22週～25週 いろいろな記号と標語をおぼえる。
- 第26週～28週 楽譜の原音に対し、オクターブ上の音や下の音をつけて弾く。
へ音記号をおぼえる。反進行奏。
音の跳躍(3度とびから8度とびまで)。
ラの音さがし(短音階への導入)。
- 第29週 メロディーの移調奏、黒鍵に慣れよう(ト長調、ニ長調、ヘ長調をあつかう)。
- 第30週 対旋律の演奏と連弾。
メロディーに、基本音や5度和音をつけた演奏。
これ以後は、こうした内容を取り入れながらエチュードによって練習している。(使用エチ

エチュードは、姉の使った本を利用したいという家庭の希望を取り入れ、バイエル、トンプソンを使わせている。

以上がレッスンを始めてから6カ月間の、おおよその指導内容である。初めの3カ月は教則本を与えず、こどもの知っている歌が直接の教材となり、「うたうこと」「音に再現してみること」を中心としていた。それによっておぼえたことはノートされ宿題となった。この宿題は、次週のはじめに必ず復習させる方法をとっていた。

4カ月目より、エチュードを使いはじめたのは、楽譜に対する理解を強めるためである。

6カ月目に入る頃には、単音はもちろん和音も完全にききとることができるようになり、読譜力もつき自発的な練習がどんどんされるようになりだしたので、多くの曲を弾かせる必要性がでてきた。そこで、2冊のエチュード（バイエル、トンプソン）を与え、演奏技術の向上につとめだした。

この第1期指導の間に、特に留意したことは、①こどもに潜在する音楽性を引き出す。②うたうことが好きになるよに育てる。③レッスンを楽しくする。の3点である。

Ⅲ 考 察

従来行なってきたレッスン法と、コダーイ・メソッドによるレッスン法とを比べたとき、曲の演奏という到達点は同じであるが、その過程にあっては、かなりの違いを感じさせられた。

1 レッスンに対するこどもの反応から

M子もU子も「1年生になったのだから」と本人が望まないのに親のすすめで、いやいや始めたレッスンだったそうだが、回を重ねるごとにレッスンが好きになり、始めてから1カ月後には、1週間が待てないと言うことを母親から聞かされた。事実、レッスン日には約束の時間より早くから来て、終わっても人のを聞いてゆくなど、うたうこと、弾くこと、すべての勉強に意欲的な態度を見せている。いやいや稽古を始める多くの子に見られる過渡期も、全く見られなかった。普通、演奏力はできても、読譜、弾きうたいなど、されにくい子が多いが、今回のレッスンでは、初回から、うたうことを条件づけたためか、弾きながらうたうことが容易である。また音程も正しくとることができ、初級としては順調な歩みを経ている。

2 メソッドの利点

① うたうことによって、音楽の喜びを味わうことができる。

メロディーをうたうことは、感情が入れやすくなるので、ただ単に弾くだけより曲想がつきやすくなる。これによって早くから、音楽の美しさを知ってゆく。

② 読譜に対する抵抗がない。従来器楽指導のなかで鍵盤楽器の部門だけ、読譜から入る指導法がとられてきた。入門するとすぐ、読譜ということが要求され、理解できないままに譜を見ながら弾く訓練がなされる。この場合、同じポジションなら指番号を頼りになんとか演奏されるが、ポジションが移ったり、反進行、対旋律などがでてくると理解できなくなる者が多いが、コダーイ・メソッドでは、耳から音をおぼえたのち、譜面と結びつけるので、抵抗なく読譜する力がついていく。（解りにくいときでも弾けばよい）。

③ ハンドサインの活用による音程練習は、音高の認識を正確にし、音程感、和音感の指導を容易にする。しかしこの方法がレッスン時だけのものであったため、おぼえるのに時間がかかった。小学校においても、鍵盤楽器の音に頼った発声練習でなく、こうした方法を取り入れたなら、もっと容易なものとなるであろう。

3 メソードの欠点

- ① ハンガリー民謡の教材になじめない。幹音や派生音をおぼえるために利用した、ハンガリーの教材≪333の読譜練習≫は、指導者自身不慣れであったこともあるが、5音音階の性格の違い（日本のわらべ唄は、主に陽旋法（レドラソミレ）である。ハンガリーのわらべ唄は、ラ・ペンタトニック、（ラソミレドラ）である）と、日本語とハンガリー語とのシラブルのくい違い（さくらを例にした場合、日本語では、さくらと3音が必要であるが、ハンガリー語の場合チュリと1音でよい）など、なじめないものが多かった。これは、メソード自体がハンガリー民謡を素材として作られているためだ。手直しの必要を痛感する。（これは、今後の研究課題でもある）。

音楽教育の手段にコダーイ・メソードを利用したとき、欠点となるのはごく一部の教材である。これも日本独自の「わらべ唄」を利用することによって補足できよう。

利点の多いメソードによる教育こそ、音楽愛好者を、そして豊かな音楽性を育てる方法だと言ってよいのではないだろうか。

要 約

コダーイは、「音楽はすべての人のためのものである。その教育が、ある一部の特別な人のみ行なわれるものであってはならないし、またどんな領域においても、人をして「名演奏家」に仕込むものではない。一般大衆が、音楽の良さがわかり、それを楽しむようではなくてはならない。」と常に述べ、音楽を愛し楽しむ手段として人々に勧めたのがうたうことであった。自らも、歌唱教材となる作品を多く作り、これを使って子ども達の教育にあたった。

このコダーイの生みだしたうたうことによって行なう教育は、声楽の分野だけをしめるものではなく、器楽教育の中でも生かされるべきものである。

ハンガリーの器楽教育で中心的役割を果たしているのは、国営の器楽学校である。そこで指導を受けている人の46%がピアノの学習者であると伝えられているが、この人達の練習課程をみると、初めの1年は肉声による音階練習の期間である。つまり、ピアノを志すものであっても、音に対しするどい感覚がもたれるように、うたうことによって訓練されるのである。次いで6年間にわたってあらゆるピアノ奏法に対する訓練がなされ、コースを終わる頃にはメンデルスゾーンの無言歌集やバッハの2声インベンションが上手に弾きこなせるようになるといわれている。この間ピアノに触れるようになった1年目では、とり扱われる曲数はわずか5曲ぐらいといわれている。1つの曲であらゆるテクニックの勉強が行なわれ、音楽的想像がもたれるように指導されていく。また、曲を完全に自分のものにできってしまうということも課せられているそうである。

練習はただ多くの曲を弾きこなせるようにさせればよい、というものではない。弾く過程でどのような体験をさせるかということによって基礎が身につくものであるといえよう。

日本のピアノ教育では、依然として、百年以上を経た教則本であるバイエル、ツェルニーを利用されることが多い。こうした教則本を使ってレッスンするにしても、コダーイの理念に基づいたうたう指導と、あらゆるテクニックをもりこんだレッスンがとり行なわれたなら、手の動きに結びついた音のイメージを強くした奏法から脱してゆくのではないだろうか。現にコダーイメソードによって指導した2人の演奏は、他のどの子よりも音のひびきに生きたものを感じさせられた。また、いつも歌いながら楽しんで弾いている姿が見受けられる。

今回は対象が個人レッスンの2名だけであったが、機会があれば幼稚園などのグループレッスンでコダーイ・メソッドによる楽器指導の実践を試みてみたいと考えている。また、大学生に対する方法も研究してみたい。

参 考 文 献

- 1) 羽仁協子：ハンガリー音楽教育法 音楽の友社（1972）
- 2) フォライ・カタリン，セーニ・エルジェーベト（羽仁協子，谷本一之，中川弘一郎共訳）（1974）
- 3) コダーイ・システムとは何か 全音楽譜出版社（1974）
- 4) 標準音楽辞典：音楽之友社（1966）